

講義「保育内容演習『言葉』指導法」における
アクティブラーニング的教授法の取り組み
—学生の振り返りを中心に—

照 屋 健

An Experiment by Active Learning Method in “Seminar
on Child Care and Education : Teaching of
‘Language’ ” : Centering on Students’ Review

Ken Teruya

豊岡短期大学 論集

第 16 号 別 冊

令和 2 年 3 月 31 日 発 行

講義「保育内容演習『言葉』指導法」におけるアクティブラーニング的教授法の取り組み

—学生の振り返りを中心に—

An Experiment by Active Learning Method in “Seminar on Child Care and Education : Teaching of ‘Language’ ” : Centering on Students’ Review

照屋 健

Ken Teruya

はじめに

近年、どの学校現場でもアクティブラーニングと呼ばれる講義を行ったほうが良いという声をよく聞く。しかし、現実的に専門学校は教諭免許を持って講義をしている教員もその特殊性のため少なく、A学園にいたっては私も含め全体の8.9%しか何かしらの教諭免許を持っていない。また、幼稚園教諭以外の小・中・高の教諭免許の保持率にいたっては、全体の6%まで下がる。よって、A学園ではアクティブラーニング自体についてあまり認知されていない。これはどの専門学校でもこのような傾向があると推測される。しかし、教諭免許を持っていたとしてもアクティブラーニング的教授法を体得し、実行できるかと言われると、それも違うと私は思う。そこには常に教諭免許保持者として、常に学生へより良い講義ができるよう自己を教育し、より高みへいけるような自己学習力が必要だと考えられ、それが教諭免許保持者として行わなければならないことだと私自身感じている。

よって、今回、A 専門学校にて新しいカリキュラムである「保育内容演習「言葉」指導法」についてアクティブラーニング的教授法を行い、それが学習者に対してどのような効力を生み出すのかを本論で論じていきたい。実質筆者はこれまで「保育内容演習「言語表現」指導法」、「保育理解「子どもと文学」」等を担当しており、それぞれの教科と今回アクティブラーニング的教授法を使った「保育内容演習「言葉」指導法」（以下：本科目）との比較にも取り組んでみたい。

方法

講義内容

本科目は、教職課程及び保育士養成課程において選択必修科目となっている。「言葉」は乳・幼児期において、その時期が未分化の要素が多く、教科として取り扱うのではなく、教育内容を5領域に分け、5つの視点から教育を行っていく保育内容5領域の一つである。よって、保育者は乳・幼児期に言葉の発達を促していく指導が中心となっていくわけだが、そのためには、保育者を目指す学生が学ばなければならない柱が大きく三つあると考えている。そしてそれは講義の流れとも一致する。

一つ目は、乳・幼児期における言葉の発達段階における一般的なモデルを学習し、そのことを基に現場で幼児教育・保育を行っていくための基礎を培っていくこと。

二つ目は、様々な児童文化について触れ、親しみ、乳・幼児期の各年齢(月齢)にあったものを選択する知識や技術、それを使った幼児教育・保育方法について学ぶ。

三つ目は、これらの知識・技術を使った上で、乳・幼児期の子供たちから発せられる言葉を、聴き、受けとめ、共感できるような人間性の育成を学生自身が行う。

これら三つは相関関係にあるわけだが、まず、一つ目の発達段階モデルを知識としてインプットした上で、二つ目の様々な児童文化に触れ、それぞれの特徴や長所、短所を捉え、どのように幼児教育・保育へ取り入れられるのかを考察し、実践していく。また、三つ目は実際に同級生同時で聴くトレーニングをし、相手の気持ちを受けとめる方法を学び、共感できるような自己学習を行っていく。

本研究におけるアクティブラーニング的教授法

講義方法だが、筆者はこれまでほとんどの講義に対してアクティブラーニング的教授法に取り組んできた。そもそもアクティブラーニング的教授法とは「生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、学生からみて受動的な教育の場では育成することができない。従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修(アクティブ・ラーニング)への転換が必要である。」と『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)』の中に出た言葉である。

この能動的学修とは、学生が主体となって関わり学べる学習方法であり、学び方も発見学習や問題解決学習、体験学習、調査学習から、グループディスカッション、ディベート、グループワーク等があげられる。つまり、講師による一方通行型の知識を教え、その知識や考えを覚えこませるような講

義形態ではないということがいえるだろう。

これらのことを鑑みて、講義の全体的な流れを下記した。

- ① この講義における課題を明確化させる。
- ② 課題に対しての今講義におけるめあてを学生自身につくらせる。
- ③ 学生自身で課題に対しての自身の考えや取り組みをノートに明示させる。
(学生一人ひとりの能力には幅があるため、机間指導時に課題の取り組みが難しい学生は個別に見直しをつけてあげる)
- ④ グループ(グループ内学生は様々な学生の意見を取り入れられるよう毎時異なるよう設定)内にてノートに記入した自身の考えを発表
- ⑤ グループ内での意見をまとめ、発表用紙に記入。全体に対して発表する。
- ⑥ それに対して他のグループは自分のノートに他グループの意見を書き込んだり、他グループの意見に対して自分の考えを書き込んだりする。
- ⑦ これらの課題に対して出た学生達の意見と一般的な考えを筆者がまとめる。
- ⑧ 講義の流れを振り返り、めあてに対してのまとめを学生自身が考え記入する。
- ⑨ 今講義全体を通してなにが分かったかなど、発見したこと、思ったことなどの感想をノートに記入する。

以下、本科目におけるアクティブラーニング的教授法を使った講義と他教科の一方通行的な教授方法における講義の比較から学生の様々な意見を振り返りながら、アクティブラーニング的教授法の導入前と後において実施した授業評価アンケートの項目からその効果を検証していきたい。

学生を対象としたアンケートの方法と内容

アンケート協力者

A 専門学校受講生 78人(男女比:男13%、女87%)

(内18歳:68人、19歳:2人、20歳:6人、22歳:2人)

アンケート時期と方法

2019年3月 質問紙によるアンケート調査

倫理的配慮

アンケート前にアンケート対象者にアンケートの目的を口頭にて説明し同意を得た。また、自由記述欄は書いても書かなくても良い旨を伝えた。

アンケートの質問内容

- ・先生の声の大きさは適切である。(声の大きさや話し方)
- ・『保育内容「言葉」指導法』のペースはあなたにとって適切である。
- ・『保育内容「言葉」指導法』は集中しやすい環境で受けることができる。

- ・『保育内容「言葉」指導法』は学生が興味のわくように工夫されて進められている。(好奇心が刺激される)
- ・先生は学生が質問や意見を言いやすいように配慮してくれる。
- ・先生は授業でつまずいた時に、適切に対処してくれる。(励ますなど、やる気を引き出す対応)
- ・『保育内容「言葉」指導法』の内容や教材は適切である。
- ・総合的に判断して私は『保育内容「言葉」指導法』に満足している。

結果及び考察

アンケート結果及び考察

下記グラフはアクティブラーニング的教授法を応用する前と後にとった授業自体の評価をアンケートで数値化したグラフである。

これらを全体的に評価すると、すべての項目で応用後の方が良い結果となっている。特に「先生は学生が質問や意見を言いやすいように配慮してくれる」の質問項目では 25.3%、「保育内容演習「言葉」指導法」は、集中しやすい環境でうけることができる。」は 25%と 4分の1も向上し、学生が意欲的に講義に参加していることがわかった。これはおそらくこれまでの一方的な情報を受け取る授業とは異なり、与えられた時間内で自分の考えを出し、人と考えを交流させることで意欲的に参加できたのではないだろうか。また、「先生は授業でつまずいた時に、適切に対処してくれる。(励ますなど、やる気を引き出す対応)」の項目では、19.4%向上した。これはおそらく学生同士がディスカッションしている間、机間指導時に学生からの問いかけが個別に発生し、それに対して一人ひとり丁寧に対応できる時間ができたことで向上したと考えられる。さらに、「保育内容演習「言葉」指導法」は、学生が興味のわくように工夫されて進められている。(好奇心が刺激される)」は 18.7%向上した。これについても、学生へ課題に対して考察する時間を与えることで、自分が一人で考えることができ、次に学生同士で意見を述べ合い、相手の意見を聞くことで好奇心が刺激されていったのではないかと推測できる。

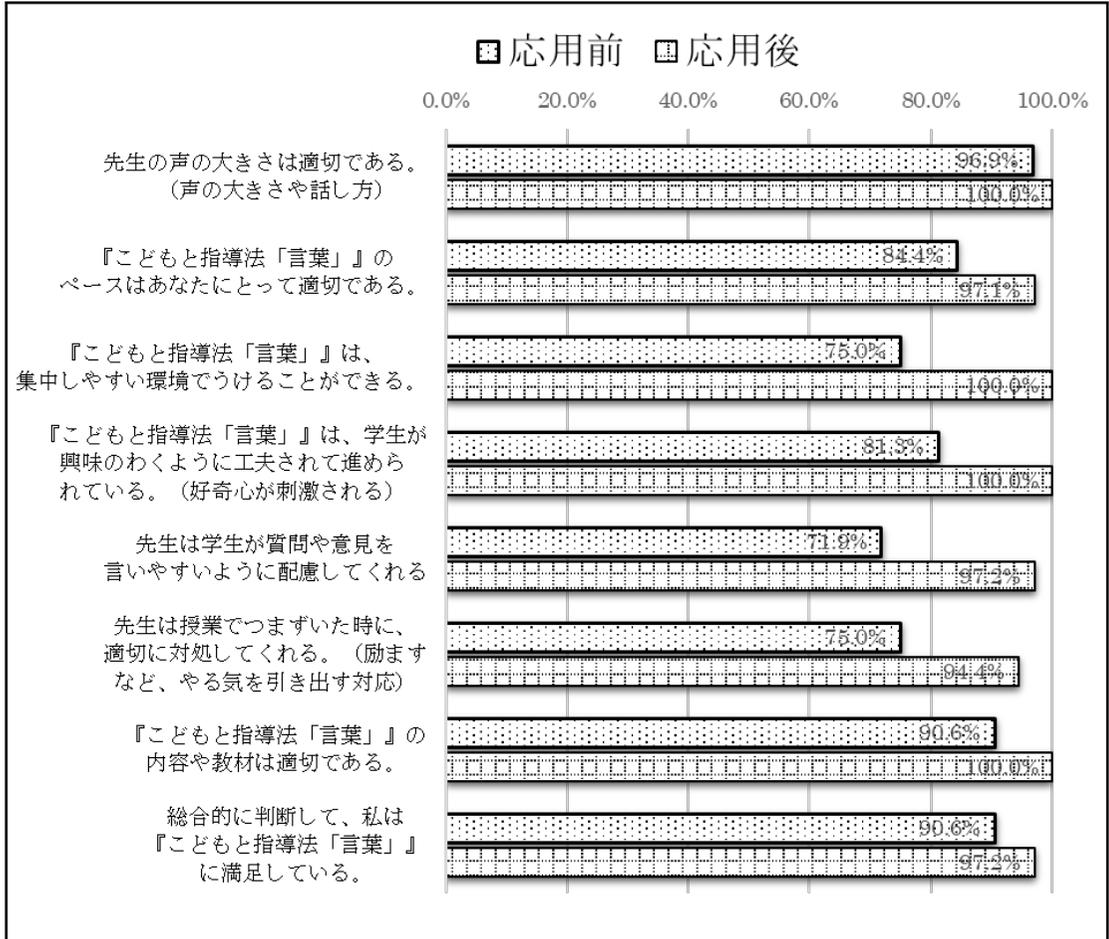


図 1 アクティブラーニング的教授法の応用前後

また、本科目においてアクティブラーニング的教授法で講義するとどのような影響があったのか、アンケートにある自由記述欄に記載された文を挙げてみる。

- ・ 学生が話し合いをしている間、先生はほとんど喋らずにいてくれたので、話し合いに集中できた。
- ・ 乳幼児期に育む言葉の基礎について自分の意見をしっかり考えることができた。
- ・ 出生から喃語までの時期を考える際、ペースが速かったが、頑張れた。
- ・ 図書室での児童文化調べとかはいつもと違う雰囲気よかった。
- ・ 早期教育の問題点、言葉が目指すことがどんなことなのかとても興味をもった。
- ・ 幼児の言葉を育てる保育者の役割が難しかったが、先生に質問して答えを導き出せた。
- ・ 先生が回ってきて教えてくれた。

- ・保育の文化財について、保育分野という所で難しく考えたときに分かりやすくヒントをくれた。
- ・子どもが自ら展開する言葉の生活を考えたときに保育者の立場を考えるのが難しかった。
- ・幼稚園教育要領、保育所保育指針を使って言葉の指導や発達が学べたことがよかった。
- ・児童文化を使って具体的な「言葉」の領域のことについて教えてくれた。
- ・自分たちでまず考え、答えを導き出せたことが満足。
- ・先生主導ではなく、自分たちが考えを出せたことがよかった。

自由記述アンケートの考察

アンケートを行った時期がすべての講義終了後であったが、自由記述には考えや答えを出せたという記述が多く見られた。このことは、学生が主体的に講義へ参加し、自分で自分なりの答えを出したことが伺える。また、毎回ノートを提出させているがほとんどの学生がノートに自分の考えを記述していたことから講義の中でしっかり自分なりの考えを持っていることが分かる。

さらに、記述には講義内容に関わる文言も含まれている。これは講義で知り得た、つまりインプットした知識を使ってアンケートに記述する、いわゆるアウトプットできたということである。このことは、知り得た知識の定着がなされているということが考えられ、アクティブラーニング的教授法の効果が表れたといえるのではないだろうか。

まとめ

今回、A 専門学校にて新しいカリキュラムである『「保育内容演習「言葉」指導法』』についてアクティブラーニング的教授法を行った。結果的に学生のアンケートからは質問項目すべての項目に対して向上が見られた。また、『「保育内容演習「言葉」指導法』』の内容が自由記述欄に出てきたことは、学生自身が自主的に講義に参加した結果、前述したように、講義内での知識をしっかりとインプットし、アンケートの自由記述の箇所にてアウトプットできた。つまり知識の定着が図られたということが確認できた。よってこの科目にはアクティブラーニング的教授法が有効であるということが少なからずいえるのではないだろうか。

今後は他の科目においても、科目特性を鑑みながら、学生の学習成果の獲得に向けて、アクティブラーニング的教授法の導入が必要であると考えます。

参考文献

- 岡田 明 (編). (2008). *保育内容シリーズ 子どもと言葉*. 萌文書林
- 岡本夏木. (1985). *ことばと発達*. 岩波書店
- 岡本夏木. (2005). *幼児期*. 岩波書店

余郷裕次. (2010). *絵本のひみつ*. 徳島新聞社編集局情報出版部

